淡海医療センター

医療の現場 #14

I want to know
Medical scene

PICK UP

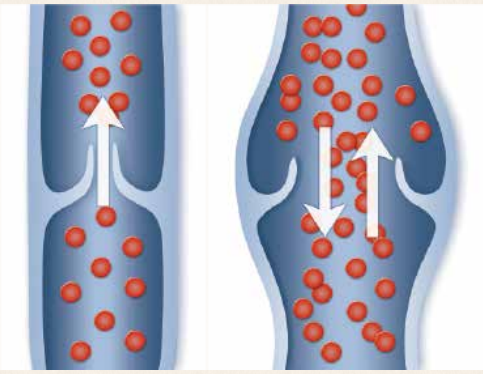
下肢静脈瘤

下肢静脈瘤(かしじょうみゃくりゅう)は下肢(足の付け根から足先まで)の静脈が異常に拡張し、瘤(こぶ)のように浮き出る病気です。

下肢静脈瘤とは

通常、下肢の静脈には血液の逆流を防止する弁がついていますが、この弁が壊れると逆流が起きて、静脈に血液が滞り、圧のかかった静脈が膨らむことで発症します。加齢や遺伝的要因、妊娠・出産、肥満、長時間の立ち仕事といったことがリスクとなります。

静脈瘤の中に血の塊ができて炎症が起こることで赤く腫れ痛みを伴うこともあります



正常な静脈弁　　壊れた静脈弁(弁不全)

下肢静脈瘤の初期の症状には、足の「だるさ」や「むくみ」、痛み、こむら返りなどがあり、さらに症状が進むとうっ滞性皮膚炎(皮膚の「かゆみ」や黒ずんで色が付く「色素沈着」)を起こし、最も重症になると皮膚潰瘍(皮膚がえぐれた状態になる)を形成し、強い痛みが出現します。

下肢静脈瘤は、「動脈瘤」とは異なり、破裂して大量出血することはありません。また、先に述べたように静脈の中に血栓(血の塊)ができることがありますが、それがどこかに飛んで行って肺や脳の血管に詰まることはありません。つまり、下肢静脈瘤は命に関わる病気ではないため、過度の心配をする必要はありません。

次のページで
下肢静脈瘤の検査方法や
治療方法について
詳しく説明いたします

詳しくは次ページへ

教えてくれるドクターは…

趣味は…
魚釣りと
ピアノ演奏です

淡海医療センター
心臓血管外科　医長
宮下(みやした)　史寛(ふみひろ)

【専門分野】
成人心臓血管外科一般・血管内治療

【学会専門医・認定医】
三学会構成心臓血管外科専門医認定機構
心臓血管外科専門医
日本外科学会 外科専門医
下肢静脈瘤血管内治療実施管理委員会
認定指導医
日本静脈学会
弾性ストッキング・圧迫療法コンダクター

心臓血管外科外来案内　**火・木・金(受付時間 8:30~11:30)**

地域に密着した、敷居の低い開かれた診療を目指しています。どのようなことでも構いませんので気軽にご相談いただければ幸いです。急なお困りの時やどういったルートで受診すべきかわからないなど、気軽に心臓血管外科外来にご相談ください。

右記QRを読み取るとホームページをご覧いただけます。

下肢静脈瘤の検査方法

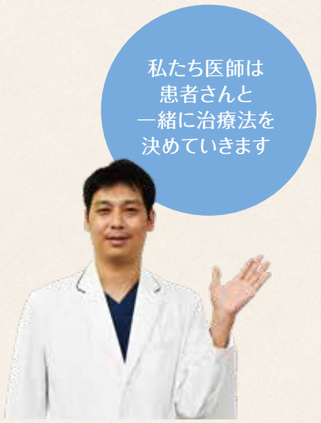
下肢静脈瘤の検査は超音波検査（エコー検査）が最も一般的で体への負担が少ない検査です。血液が逆流している血管（静脈）を診断し、治療適応を判断します。

下肢静脈瘤の治療法

弾性ストッキングによる治療

下肢静脈瘤は命に関わる病気ではないため、その治療は症状の改善が目標になります（無症状の方は治療適応となりません）。残念ながら、下肢静脈瘤は放置することで治癒することはなく、薬物療法もありません。圧迫療法（弾性ストッキングの着用や弾性包帯の装着）は最も簡単に行える治療であり、圧迫している間は症状の改善が期待できますが、圧迫をやめると元の状態になってしまいます。

ハイソックスタイプ（膝下タイプ）　ストッキングタイプ（膝上タイプ）　パンストタイプ



症状が強く、希望される患者さんには手術をお勧めしています。従来は「ストリッピング」といって静脈瘤になった血管に針金を通し、引き抜く手術がなされていましたが、全身麻酔や下半身麻酔が必要なため、ある程度の期間の入院が必須でした。また、この治療は周囲の神経を傷つける等のリスクもありました。近年では、局所麻酔による血管内治療（カテーテル治療）が主流になっており、当院でも血管の中をレーザーや高周波の熱で焼く「血管内焼灼術」や、血管の中に医療用の接着材を注入する「血管内塞栓術」を行っています。

「血管内塞栓術」は、熱を使わない治療のため熱傷（やけど）のリスクがない、局所麻酔が1か所で済むといったメリットもありますが、比較的新しい治療のため長期成績が不明な点、血管内に異物が残るため感染に注意が必要であること、接着材に対するアレルギー反応を起こす方もいらっしゃるといった注意点もあるため、患者さんと相談しながら術式を決定しています。

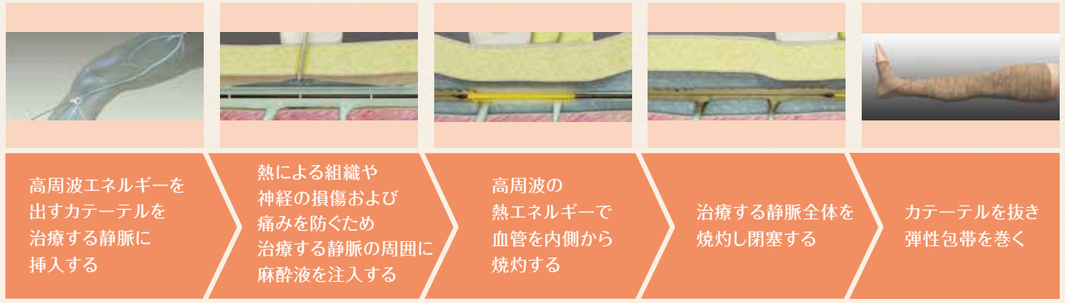
「グルー治療」と「高周波焼灼カテーテル治療」

■ 医療用接着材によるグルー治療

- 下肢静脈瘤専用の接着材（グルー）で血管を閉塞する治療法
- 麻酔を1か所にする
- 治療後当日よりジョギングなどの軽い運動や飛行機での移動が可能
- 術後の弾性ストッキングの着用は任意

■ 高周波焼灼カテーテル治療

- 高周波による熱で血管を閉塞する治療法
- 複数箇所に穿刺し、治療する静脈の周囲に麻酔液を注入する
- 世界では20年、日本でも10年以上前から行われている治療法
- 治療後通常の歩行は当日から、運動や長時間の立ち仕事は約1週間後から可能
- 術後の弾性ストッキングの着用が必須



ドクターよりメッセージ

また、再発症例や血管の蛇行が強くてカテーテルの挿入が困難な場合は、血管内に硬化剤を注射する「硬化療法」や局所麻酔で皮膚に小さい切開を行って逆流源の血管をくくる「高位結紮術」といった手術を組み合わせて行う場合もあります。
術式の選択については、下肢静脈エコーの結果や患者さんの症状に応じて、お一人お一人に最適な治療を提供できるように相談しながら進めていきます。